

心のバリアフリー

小浜市立小浜中学校 三年 大橋奏斗

「バリアフリー」なんて言葉は、多様性が重要視されるこの現代社会において、ほとんどの人間が聞き馴染みのある言葉なのではないだろうか。でも、多くの人はこの言葉に距離を感じている。実際僕もその中の一人であった。非日常的だし、ユニバーサルデザインの方が身近で馴染みがある、とずっと思っていた。自分がその利用者の立場になるまでは。

僕は、小学校の時からずっとバスケットボールをしていた。そして中学三年生になり、いわゆる「最後の夏」というものが、僕にもやってきた。気合十分、足つき防止剤も摂取して万全の体勢で大会を迎えた、はずだった。リーグ最終戦。勝てば地区一位通過で県大会に出場できる大一番。相手は、何度も勝ったことのあった学校だった。序盤はこちらが優勢だったが、相手は序々に追いついてきた。そしてついに同点。そこで焦ってしまったのがいけなかったのだろう。着地時、相手選手の足を踏み、足首をひどく捻ってしまった。退場後、相手に逆転を許

しそのまま負けた。悔しさもあったが、それ以上に痛みがひどく、敗北感も相まってその夜はよく眠れなかった。

翌日、目が覚めたら、痛みで立つことができなかった。ケンケンで何とか歩行できたものの十分に移動することもままならなかった。朝一で市内の病院を訪れた時、入口で、僕は人生で初めて車いすに乗った。ケンケンなんかよりも断然快適で、初めて乗るというワクワク感すらあった。今思えば恥ずべき考えだが、自分だけ他とは違っているという特別感に浸っていたのかもしれない。でも、その後何度か病院に通ううちに、ん？と疑問というか不便さのようなものを感じるようになった。

まずは、「移動」である。診察室の通路は狭く、車いすは小回りがきかないため、Uターンやカーブが非常に困難であり、「ああ、歩きたい。」と感ずることが多々あったのだ。

また、「幅」も大きな障壁であった。容易に想像できると思うが、車いすは結構な横幅をとってしまうため、他の患者さんや医師・看護師さんに迷惑をかけてしまい、肩身の狭い気持ちで、病院内を移動していた。

この二つの事例は、車いすに乗る前からだいたい予想できていたのだが、僕が、車いすに乗って初めて気づいたのは、「目線」だ。車いすはその名の通り、「いす」な

ので、常に座った状態だ。加えて車高の低さもあり、すごく小さくなった感が僕にあった。それ故、すれ違う人々の視線にうつすら恐怖を感じたのだ。見下ろされている、というだけの単純な事実であったのだが、他人より少し身長の高かった僕は、そのギャップに「怖い」という感情を覚えた。「邪魔だな。」「なんで避けなきゃいけないんだよ。」「イライラする。」なんて、言われてもない憶測が僕の頭の中で錯交していた。その時はただ、怖かった。邪魔者扱いされることが、何もしていないのに悪印象を持たれてしまうことが。

ふと、我に返った。自分もそうだったのではないのか。車いすを利用してしている人々に、そのような視線を送ってきたのではないか。心の中で自問自答する。己を問いたです。故意ではない。それでもどうしても、日常生活で車いすの人を見かけると目が行く。悪意もない。それでもその間にある物理的高低差は、時に人の心にもまた、高低差を生んでしまう。視線を送ることは決して悪いことではない。それでも感じ方の違いから嫌な思いをさせてしまうかもしれない、ということを常に念頭に置いておくことが、周りの人ができる行動の第一歩なのではないかと僕は考えた。

ただ、「目線」はネガティブなだけでなくポジティブ

でも兼ね備えている。前述の通り、車いすに乗っている
と人々の視線をオーバーに感じてしまう。しかし、先ほ
ど取り上げた例がネガティブなだけであり、ポジティブ
な一例もある。詳しく説明すると、ネガティブをオーバ
ーに感じるのであれば、裏を返せばポジティブもオーバ
ーに感じるとも言える。車いすに乗っている間、親切に
してくれる周りの人々がいつも以上に優しく感じられた。
それはおそらく、看護師さんやお医者さんが優しい視線
を送ってくれたり、視線を合わせてくれたりしたこと
にあるのだろう。車いすに乗っているだけでこうも感じ方
が違ってくるのかと、正直とても驚いた。

「バリアフリーって何？」という疑問に対して、大体
の人は設備や工夫など「物」を思い浮かべるだろう。だ
って、そういうイメージだから。でも、そのイメージに
縛られるのはよくない。「バリア」とは本来「障壁」と
いう意味だけど、そのニュアンスは変化しつつある。障
壁^{イコール}活動の妨げになるもの、だけど、活動の妨げにな
るものって本当に、「物」だけなのだろうか。心の中
にもバリアがあるはずだ。僕が体験したことがまさにそれ
だ。心の傷は、痛い。単位なんかじゃ表せないし、そう
簡単に治らない。だからこそ、「心のバリアフリー」も
是非考えてみてほしい。